様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １０ 日現在

機関番号：３４３１１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｈ０１２６６

研究課題名（和文）日本語敬語形成モデルの構築ー生成・運用・伝播に注目してー

研究課題名（英文）Construction of a Japanese honorific formation model - Focusing on generation, operation, and dissemination -

研究代表者
中井　精一（NAKAI, Seiichi）

同志社女子大学・表象文化学部・教授

研究者番号：９０３０３１９８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　12,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、近畿地方中央部の京都ならび大阪を中心に、国立国語研究所等の既存調査データの再分析を行い、社会言語学を中心として言語地理学や文化人類学、考古学、地理学等の隣接分野との協業によってフィールド・ワーク（再調査）を実施し、日本語敬語形成に向けた各地の実態把握を行い、日本語敬語形成に向けた基盤整備とそれをもとにしたモデルの構築をめざした。
本研究によって外部から把握が困難な敬語行動や敬語意識に関する実態把握が進み、日本語敬語形成に向けた基盤整備ならびに今後の研究手法や研究の視点の提示ができたものと考える。

研究成果の学術的意義や社会的意義
敬語や敬語行動は、日本語学および言語地理学、社会言語学発展のうえで、絶えず注視すべき言語事象である。またその研究は、地域格差や社会格差、貧困や差別といったわが国がただちに対処すべき社会問題の解決において必要不可欠なデータを提示しうるものと考える。

研究成果の概要（英文）：This study focuses on reanalyzing existing survey data from the National Institute for Japanese Language and other sources, centered around Kyoto, Nara, and Osaka in the central Kinki region. By conducting fieldwork (re-surveys) in collaboration with related fields such as sociolinguistics, linguistic geography, cultural anthropology, archaeology, and geography, the study aims to understand the actual conditions of honorific language use across different regions. The goal is to establish a foundation for the formation of Japanese honorifics and to construct a model based on this foundation.
Through this study, we have made progress in understanding the actual conditions of honorific behavior and consciousness, which are difficult to grasp from an external perspective. We believe that this has laid the groundwork for the formation of Japanese honorifics and has provided new research methodologies and perspectives for future studies.

研究分野：日本語学、方言研究

キーワード：言語行動　中心性　文化伝播

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

近畿地方中央部には、京都・大阪という大都市を有し、長くわが国の政治・経済・文化の中心地であった。これまでの敬語研究によれば、京都市の敬語形式は、府内はもとより滋賀県、三重県伊賀地方および福井県や石川県、富山県といった北陸地方にまでその影響を与えている。また大阪市のそれは、隣接する兵庫県や奈良県は言うに及ばず、香川県や徳島県、岡山県などにもその影響をおよぼしているとされる。

しかしながら、近畿地方中央部から近い大阪府泉南地方や和歌山県、兵庫県淡路島は、敬語使用が極めて希薄であり、その影響は感じられない。これらの地域は経済活動も盛んで京都や大阪とも日常的な交流もあることから中央の言語文化が波及しなかったとは考えられない。一方、北陸地方の富山県高岡市や砺波市周辺では、テ敬語や「オ～スル」、「～ゴザル」といった古い敬語形式も認められるが、近畿地方中央部で顕著な動詞＋助動詞の使用も活発であり、敬語行動や敬語意識は近畿地方中央部のそれに近いものがあって、これまでの「地域差は時間差を示す」と言った方言分布の原則では説明するこができない。

本研究では、敬語の受容・定着について、既存の方法・視点を見直し、言語を受容させる個別地域の特性（地域特性）に注目し、日本語敬語形成に関するモデルの構築をめざして新たな研究プロジェクトを立ち上げることとした。

２．研究の目的

本研究は、近畿地方中央部の京都ならび大阪を中心に、国立国語研究所等の既存調査データの再分析を行い、社会言語学を中心として言語地理学や文化人類学、考古学、地理学等の隣接分野との協業によってフィールド・ワーク（再調査）を実施し、地域間の比較および相互影響を解明することで日本語敬語形成に向けた各地の実態把握とそれをもとにした新たな視座からのモデルの構築をめざすものである。

３．研究の方法

本研究では、まず国立国語研究所の三重県伊賀市、愛知県岡崎市、山形県鶴岡市の調査データおよび『方言文法全国地図』・『新日本言語地図』等の既存調査データの再分析を行う。とともにこれまで本研究のメンバーが共同で実施した基盤研究(B)「都市の地域中心性と敬語行動―伊賀上野における第二次調査を中心に―」および基盤研究(B)「無敬語地帯の地域特性と敬語行動－日本語敬語研究の再起動をめざして－」によって収集したデータおよび知見を踏まえて、言語形式、言語体系、言語行動、言語意識について検討を行い、日本語敬語形成についての一次モデルを構築する。一次モデルを踏まえ、文化人類学をはじめとする隣接科学との協業によって、

1、敬語形式の分布、特に伝播と受容について地域特性との観点から検討。
2、近畿地方における中心部：京都市、大阪市、奈良市における敬語形式の使用および敬語行動に関するする現地調査と資料収集。
3、近畿地方に隣接する北陸地方の石川県や富山県、山形県などの日本海沿岸部で敬語形式の使用および敬語行動についての現地調査と資料収集。
4、大阪府南部や和歌山県などの太平洋沿岸社会における社会規範と対人配慮行動ににについて現地調査と資料収集。
5、敬語行動に伴う意識とその説明体系についての現地調査と資料収集。

を行うことで、日本語敬語形成に向けた各地の実態把握とそれをもとにしたモデルの構築をめざす。

４．研究成果

既存調査データ、特に『方言文法全国地図』や『新日本言語地図』を検討した結果、各地で使用される敬語形式は、近畿中央部で使用される「ハル・ヤハル」、その外側の東海や北陸、中四国では広く使用される「キナサル（ナサル）」、「キテ、キテヤ」と言ったテ・テヤ敬語もすべて近畿地方内部でも使用されている。また北陸から中部、東海地方および四国や山陰地方で使用される「オイデル」、東北の日本海側や山陰、九州で使用される「コラル（ル・ラル）」や「キヤル（ル・ヤル）」、「コサス（ス・サス）」、「キッシャル（シャル）」、岩手県一関市や富山県平村、石川県白峰村や島根県海士町などで使用される「ゴザル」についても近畿地方およびその周辺で使用されていたことが確認されることから、これらはすべて近畿中央部から発信され、定着した敬語形式であることが確認された。また近畿地方中央部に近い、大阪府南部や和歌山県、兵庫県の淡路島などでは敬語使用が希薄な地域であることもあらためて確認できた。

これらを前提に本研究では、上記①～⑤に取り組んだ。

1 敬語形式の分布、特に伝播と受容について、近畿地方中央部から発信された敬語形式受容の有無に注目すると、中央の文化やことばが地方に受け入れられている地点は、中央すなわち近畿地方中央部と同一文化を共有する社会と言える。一方、近畿地方中央部に近く、日常的に交流をもつ地域にあっても、「ハル・ヤハル」や「ナサル」、あるいは「テ・テヤ」敬語を使用せず、極

めて淡泊な敬語運用を継続する大阪府南部や和歌山県、兵庫県淡路島などでの地域は中央とのあいだに齟齬があって、異なる言語基盤を有している可能性が想定される（５主な発表論文等〔雑誌論文〕中井精一 2024）。

2-1 京都市で使用される形式間の待遇差と「ハル」の用法について再分析したところ、京都市で使用される敬語形式には（高）「レル・ラレル」→「オ～ヤス」→「ハル」→ゼロ形式→「ヨル」（低）があるが、a「オ～ヤス」は活用が消滅して、オイデヤスやオコシヤスのような挨拶語としてのみ残存していること、b「ヨル」はもっぱら男性が使用するとされるが、「ヨル」を使用しない男性もかなり存在すること。c「レル・ラレル」は「ハル」に比して待遇度が高いとされるが、対者待遇においては、京都語理解する者には「ハル」を、理解しない者には「レル・ラレル」を使用する傾向のあること。また d 中井精一(2012)で「近畿中央部の「ハル」は、話し手の評価・感情がプラスの場合に使用」と言った解釈であったが、京都市では、そもそも自身の評価を表出させることを控え、マイナスの評価・感情であっても「ハル」を使用するということがわかった（５主な発表論文等〔図書〕：中井精一 2023）。

2-2 奈良県北部地域では、「コラル（ル・ラル）」や「キヤル（ル・ヤル）」などの古い敬語形式は、衰退していて、若い世代での使用は皆無である。奈良県北部地域の敬語形式について、経年変化を、大和タイムスのコラム「ふる里のことば」（66 回「行っこる　ハル、ナハルつけて敬語に」乾健治 1970/07/02 (木)、 109 回「下さいをタモレ」乾健治 1970/08/21 (金)、503 回「奈良の女言葉」北村信昭 1972/01/10 (月) 、542 回「「行かいす」山口英雄 1972/03/08 (水)、 579 回「文末表現に「イス」 カカイス、ヨマイス」田畠勤也 1972/05/07 (日)、 604 回「『チャル』訛りとその周辺」浦前正巳 1972/06/21 (水)」をもとに検討した。その結果、奈良県北部地域で使用される敬語形式は、この 50 年で大きく変容し、特に比較的狭い範囲で使用されていた「ヤル」、「ル・ラル」、「イス・ヤイス」、「タル」、「ヘル」と言った助動詞は、現在では共通語の敬語形式や京都・大阪で使用される「ハル・ヤハル」に置き換わってしまったが、1970 年代にはこれらは活発に使用されていたことを確認した（５主な発表論文等〔雑誌論文〕中井精一 2024）。

3-1 北陸金沢市で使用される主な敬語形式は、「マサル」「ナサル」「レル・ラレル」である。金沢で使用されている「マサル」は、かつては非常に高い敬意を表す敬語形式であったが、調査によって、衰退の一途をたどっていることがわかった。また「マサル」の敬意が下がり、かわって新たに流入した「ナサル」が勢力をもっている。かつて金沢では、極めて丁寧な場面においても「マサル」を使っていたが、近年ではそう言った場面での使用は見られない。日本社会の変化に連動し、地域社会の有り様も変化し、特に外部からの金沢への移住者の増加により、誰もが理解する「ナサル」「レル・ラレル」を使うことにより、在来の「マサル」が衰退した。敬語形式の多寡に注目すると金沢は、「マサル」のほかに主要な形式は見当たらないが、言語行動に注意を向けるとお辞儀や相づち、話すスピードやイントネーションなどを状況に応じて細かく使い分けていて、金沢の敬語運用は、決して単純とは言えないものであった（５主な発表論文等〔図書〕：中井精一 2023）。以前実施した三重県伊賀市での調査時も感じたが敬語形式の多さが敬語の豊かさや都市の上品さを示すものではないことがわかるとともに、今後取り組むべき敬語研究の方法が明確になったと考える。

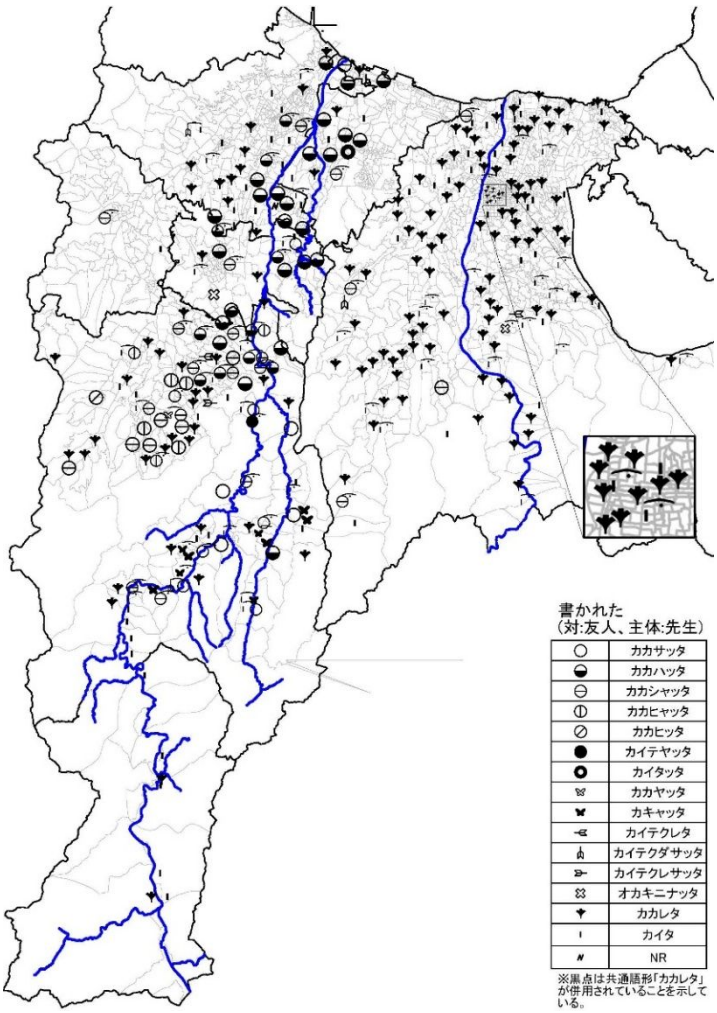

図 1　庄川・神通川流域言語地図

3-2 富山県西部地域の敬語運用については、下野雅昭(1983)および真田信治(1990)に詳しい。当該地域では「シャル・サッシャル」系、「レル・ラレル」系、「ヤル」系および「テ・テヤ」系の 4 種類が報告されている。「シャル・サッシャル」系は

県内全域で。「レル・ラレル」系は、県東部の富山市を中心に使用されるとされてきた。また「ヤル」系は、県西部の五箇山を含む山間部で、「テ・テヤ」系は県西部の高岡で使用されると言われてきた。本研究では、研究協力者の真田信治を中心に敬語形式の使用および敬語行動の実態把握を行い、再検討を進めた（５主な発表論文等〔学会発表〕：真田信治 2019）。

県東部神通川流域と県西部庄川流域の敬語形式の現状について、「庄川・神通川流域言語地図」を作成して確認したところ、それぞれの流域で使用される敬語形式が大きく異なるとともに、西部庄川下流域の高岡や砺波の「カカハッタ(シャル系)」や高岡の「カイタッタ(タッタ・テヤ系)」が衰退し、東部富山市で使用される「～レル・ラレル」に置き換わっていることが確認された。高岡においては 1985 年に刊行された『高岡の方言第 2 集』との比較を行い、この 40 年間で「～レル・ラレル」が急速に浸透したことが確認された（５主な発表論文等〔雑誌論文〕中井精一 2021（砺波市立散村文化研究所紀要））。

3－3 日本海沿岸の鶴岡市においては、国立国語研究所の『方言文法全国地図』GAJ、『新日本言語地図』NLJ および鶴岡市調査の結果を検討し、GAJ などから当該地域では、第三者に対する敬語行動が希薄であることが確認できた。

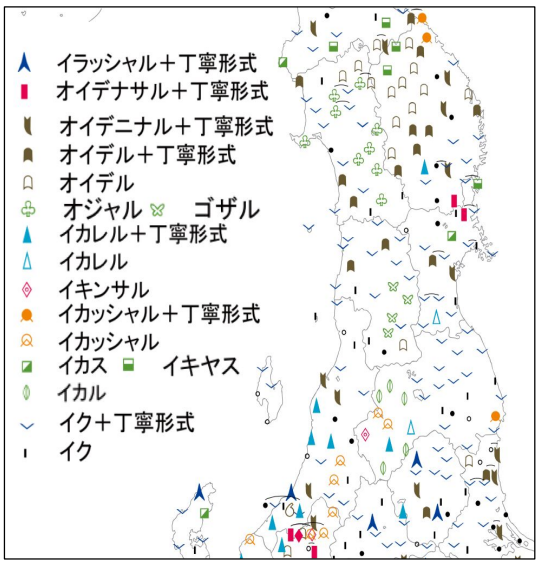

図 2：対者敬語(GAJ275)の山形県周辺地域

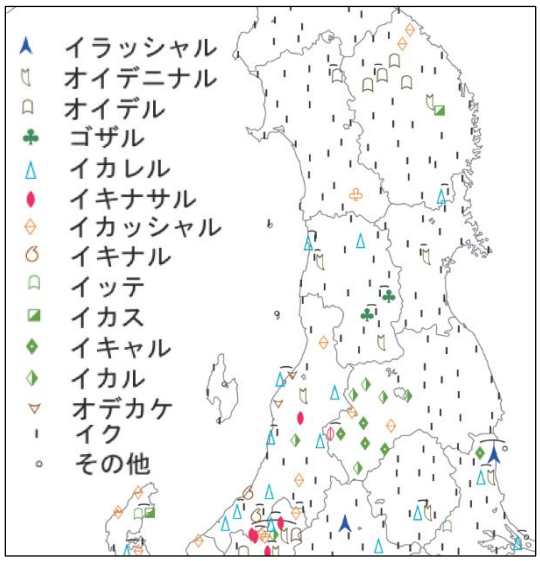

図 3：第三者待遇(GAJ295)の山形県周辺地域

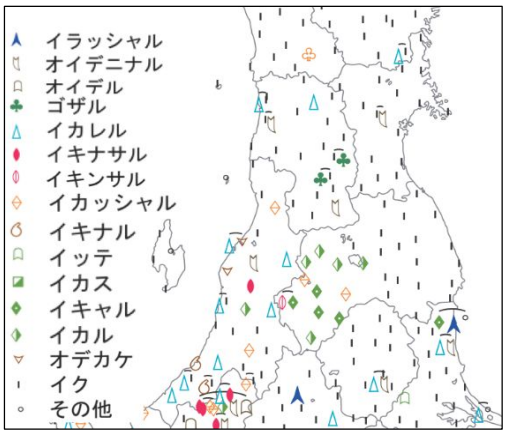

図 4：山形県周辺地域拡大図(GAJ295)

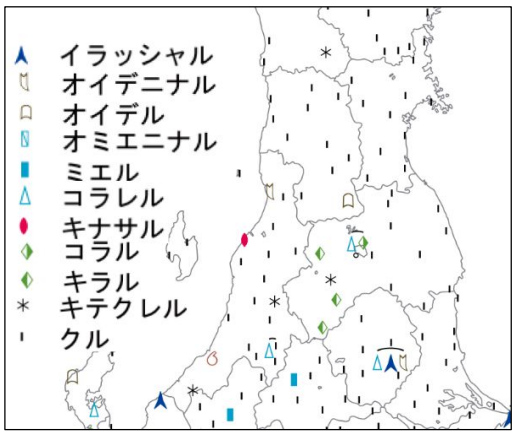

図 5：山形県周辺地域拡大図(NLJ144)

GAJ と NLJ の比較では、約 30 年のあいだに敬語使用が衰退していることが確認できた。これらをもとに鶴岡市で調査を行った結果、既存調査と同様、敬語使用が希薄な地域であることを再確認できた。また比較的敬意の高い「学校の先生に向かって」の場面で「イカハル」「ゴザハル」などの方言敬語がわずかに使用されるが、大半は共通語形を用いていて、鶴岡市では方言敬語の衰退が著しく、現在ではほとんど使用されないことがわかった。また対者敬語と第三者待遇を比較した場合、鶴岡市では第三者待遇においてほとんど敬語使用のないことが確認できた（５主な発表論文等〔学会発表〕：高野遥菜 2021）。

4－1 敬語行動が希薄とされる大阪府南部の泉南地域および和歌山県内で実施された既存調査データの再分析および実態把握を行ったところ、日常的に「レル・ラレル」を使用する大阪市では、「ハル」との待遇の差がはっきりとしていて、常に「レル・ラレル」の方が待遇が高くなる。

これに対し、和歌山県および大阪府泉州地域では、「レル・ラレル」と「ハル」の待遇度にほとんど差がない（敬語使用が希薄なため、当該地域では日常会話において、「レル・ラレル」、「ハル」をはじめ、他の敬語形式を使用することがない）ことがわかった。

「くれる」「もらう」は、恩恵の授受を示す機能も持つが、その機能にとどまらず、軽い敬意を表す形式として使用されようになったという指摘がある。当該地域でも「クレル」や「モラエル」が単なる受益表現でなく、敬語使用と同様に、聞き手への配慮を表す形式となっていることが確認できた（５主な発表論文等〔学会発表〕：松丸真大 2023）。

4－2 敬語行動が希薄とされる大阪府南部の泉南地域および和歌山県内の人びとは、衣食住の基盤である地域社会においては、「無敬語」での言語生活を送り、通勤や通学で大坂市内などの有敬語地域に出向き、職場や学校などの活動に際しては「有敬語」に切り替えていることがわかった。このことから敬語運用の希薄な地域には、その社会に応じた対人コミュニケーションの規範があること、「無敬語地帯」に代表される敬語運用の希薄な地域では、長い時間をかけて営んできた地域社会のルールとコミュニケーションの規範をなお維持している社会であると言えよう（５主な発表論文等〔雑誌論文〕中井精一 2021（『地域と大学』））。

5 敬語行動とその意識、またその説明の体系としては、大阪府南部の泉南地域および和歌山県各地では、敬語を使って上下関係を表したり、相手を遠ざけたりすることよりも、優しく丁寧に言うことに重点が置かれ、目上であっても、相手との関係によっては、敬語を使用しないという選択が行われている。また敬語は、外部から伝わった余所行きの言語表現であり、敬語を使用することで当該地域の「丁寧な思い」は伝わらず、日常的に使用する「無敬語」には、当該地域の社会関係や人間関係に基づく言語表現であり、あえて敬語を使用することを回避する意識が働くことも少なくないことがわかった（５主な発表論文等〔雑誌論文〕中井精一 2023・〔学会発表〕：ダニエル・ロング 2023）。

初年度より、COVID-19 の影響を受け、当初の計画を一部変更せざるを得なくなったが、本研究によって外部から把握が困難な敬語行動や敬語意識に関する実態把握も進み、日本語敬語形成に向けた基盤整備ならびに今後の研究手法や研究の視点の提示ができたものと考える。

（引用文献）

大西拓一郎編(2015)『新日本言語地図―分布図で見渡す方言の世界―』朝倉書店
国立国語研究所(1953)「地域社会の言語生活－鶴岡における実態調査－」秀英出版
国立国語研究所（1957）『敬語と敬語意識』秀英出版
国立国語研究所(1974)「地域社会の言語生活－鶴岡における 20 年前との比較－」秀英出版
国立国語研究所（1983）『敬語と敬語意識　岡崎における 20 年前との比較』三省堂
国立国語研究所(1994)「鶴岡方言の記述的研究－第三次調査－」集英出版
国立国語研究所(2006)『方言文法全国地図６』国立国語研究所
国立国語研究所(2015)「第 4 回鶴岡市における言語調査報告書　資料編：第 2 分冊　[語彙・文法,言語生活項目]編」統計数理研究所・国立国語研究所
真田信治（1990）『地域言語の社会言語学的研究』和泉書院
下野雅昭(1983)「富山県の方言」，飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編『講座方言学 6
―中部地方の方言―』pp.305-335，図書刊行会
中井精一(2012)「近畿中央部型待遇表現形式の受容と地域構造」『都市言語の形成と地域特性』和泉書院 pp175-214
中井精一・松ヶ平なつみ（2013）『伝統的地方都市の敬語行動　伊賀上野における第 2 次調査データ』（科研費成果報告書）富山大学人文学部日本語学研究室
中井精一（2019）『紀伊半島西部沿岸域における言語の動態研究』 田辺市教育委員会

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計21件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 中井精一	４．巻 38
２．論文標題 富山県西部域における敬語行動の変容-佐伯安一編著『高岡の方言　第2集』と比較して	５．発行年 2021年
３．雑誌名 砺波市立散村文化研究所研究紀要	６．最初と最後の頁 54-59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Seiichi NAKAI	４．巻 21
２．論文標題 Toponymes et parlers regionauxde la region de Toyama : autourdes noms dialectaux de lapomme de terre dans les bassinsdes rivieres Jinzu et Sho	５．発行年 2021年
３．雑誌名 OpenEdition Journals 21 MARSEILLE FRANCE	６．最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4000/geolinguistique.5915	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Daniel LONG	４．巻 18
２．論文標題 言語景観に「記録」された植民地時代の歴史－‘colonial lag’の観点からみた日本語起源借用語－	５．発行年 2022年
３．雑誌名 東西人文	６．最初と最後の頁 49-78
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.22856/jewh.2022.18.49	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 ダニエル・ロング	４．巻 1
２．論文標題 ボリビア日系社会の言語接触と混合言語	５．発行年 2022年
３．雑誌名 松田真希子、中井精一、坂本光代編『「日系」をめぐることばと文化』くろしお	６．最初と最後の頁 164-178
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 ダニエル・ロング	4．巻 518-7
2．論文標題 接触言語の文法を計量的に捉える ―起点言語の語順の相関係数をマック法で比較する―	5．発行年 2022年
3．雑誌名 人文学報	6．最初と最後の頁 1-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 大西拓一郎	4．巻 1
2．論文標題 可能の表現―可能形式の分布と地域差―	5．発行年 2022年
3．雑誌名 岸江信介・中井精一編『地図で読み解く関西のことば』昭和堂	6．最初と最後の頁 217-235
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 松丸真大	4．巻 1
2．論文標題 推量・推測と確認	5．発行年 2022年
3．雑誌名 岸江信介・中井精一編『地図で読み解く関西のことば』昭和堂	6．最初と最後の頁 145-160
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 中井精一	4．巻 4
2．論文標題 日本語の運用と継承ーブラジル富山県人会の調査をもとにー	5．発行年 2021年
3．雑誌名 『富山大学人文学部叢書　人文知のカレイドスコープ』	6．最初と最後の頁 2-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 中井精一	4．巻 4
2．論文標題 泉州の方言調査報告　方言から見る泉州・泉大津	5．発行年 2021年
3．雑誌名 『地域と大学』（泉大津市・桃山学院大学連携事業紀要）	6．最初と最後の頁 3-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 大西拓一郎	4．巻 1
2．論文標題 言語地図を読み直す	5．発行年 2020年
3．雑誌名 日本方言研究会 方言研究支援プロジェクト　http://dialectology-jp.org/wiki.cgi?page=%CA%FD%B8%C0%B8%A6%B5%E6%BB%D9%B1%E7%A5%D7%A5%ED%A5%B8%A5%A7%A5%AF%A5%C8	6．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 中井精一	4．巻 1
2．論文標題 富山県の方言ーその特徴と地域差	5．発行年 2020年
3．雑誌名 大学的富山ガイド	6．最初と最後の頁 145-159
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 大西拓一郎	4．巻 38(12)
2．論文標題 言語変化・方言分化が起こりにくいところ―方言地図からさぐるー	5．発行年 2019年
3．雑誌名 日本語学	6．最初と最後の頁 48-56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Onishi, Takuichiro	4．巻 4(2)
2．論文標題 On the Relationship of the Degrees of Correspondence of Dialects and Distances	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Languages	6．最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 竹内史郎・松丸真大	4．巻 1
2．論文標題 京都市方言における情報構造と文形態―格標示とイントネーション標示による分裂自動詞性―	5．発行年 2019年
3．雑誌名 日本語の格標示と分裂自動詞性	6．最初と最後の頁 67-102
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 大西拓一郎	4．巻 1
2．論文標題 方言安定期と方言地理学	5．発行年 2023年
3．雑誌名 『方言地理学の視界』（勉誠社）	6．最初と最後の頁 21-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 中井精一	4．巻 1
2．論文標題 敬語の言語地理学 ―日本語敬語形成論の構築にむけて	5．発行年 2023年
3．雑誌名 『方言地理学の視界』（勉誠社）	6．最初と最後の頁 183-196
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 中井精一	4．巻 1
2．論文標題 大和タイムス『ふる里の言葉』と奈良県方言	5．発行年 2024年
3．雑誌名 『ふる里の言葉rerecard』（奈良県立大学ユーラシア研究センター）	6．最初と最後の頁 8-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 川村清志	4．巻 246
2．論文標題 地域社会における近代教育と生業への参加過程―戦前の宮城県気仙沼市の事例から	5．発行年 2024年
3．雑誌名 『国立歴史民俗博物館研究報告』	6．最初と最後の頁 123-144
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計23件（うち招待講演　0件／うち国際学会　3件）

1．発表者名 中井精一
2．発表標題 日本語敬語形成論の構築にむけて
3．学会等名 地域言語研究会2021年度研究発表会
4．発表年 2021年

1．発表者名 能美仁
2．発表標題 学力ゾーンと敬意表現
3．学会等名 地域言語研究会2021年度研究発表会
4．発表年 2021年

１．発表者名 高野遥菜
２．発表標題 山形県庄内地域の敬語について
３．学会等名 地域言語研究会2021年度研究発表会
４．発表年 2021年

１．発表者名 大西拓一郎
２．発表標題 言語地図を読み直し、変化を検証・抽出する
３．学会等名 Covid-19の影響下における方言研究のありかたを模索するワークショップ
４．発表年 2020年

１．発表者名 大西拓一郎
２．発表標題 方言分布の基本則と分布形成
３．学会等名 東京外国語大学大学院着任教員による研究会2020
４．発表年 2020年

１．発表者名 大西拓一郎
２．発表標題 「コンタミネーション」をめぐって
３．学会等名 「通時コーパス」シンポジウム2021
４．発表年 2021年

１．発表者名 中井精一
２．発表標題 南米日系人社会における日本語・日本文化の継承とその意義
３．学会等名 International Conference on Social, Linguistic and Human Mobility and Integration (EJHIB2019)（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 大西拓一郎
２．発表標題 地名と人名の地理的関係―行政域名と名字に基づく検証―
３．学会等名 日本地理言語学会第1回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 大西拓一郎
２．発表標題 家族と仲間の東西とことば―父親への尊敬語―
３．学会等名 地域言語研究会2019年度第３回研究発表会
４．発表年 2020年

１．発表者名 ロング・ダニエル
２．発表標題 ボリビア・パラグアイ日系調査から得られた知見ー複言語状況と混合言語に注目してー
３．学会等名 International Conference on Social, Linguistic and Human Mobility and Integration (EJHIB2019)（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 川村清志
２．発表標題 海藻利用の海藻の比較民俗分類学ー日本と韓国における海藻利用を巡ってー
３．学会等名 人間文化研究機構プロジェクト「地域における歴史文化研究拠点の構築
４．発表年 2019年

１．発表者名 松丸真大
２．発表標題 京都市方言の活用体系伊賀上野の敬語行動
３．学会等名 地域言語研究会2019年度第２回研究発表会
４．発表年 2019年

１．発表者名 真田信治
２．発表標題 富山県西部地域の敬語体系と史的変遷について
３．学会等名 地域言語研究会2019年度第１回研究発表会
４．発表年 2019年

１．発表者名 中井精一
２．発表標題 南米日系人社会における日本語・日本文化の継承とその意義
３．学会等名 International Conference on Social, Linguistic and Human Mobility and Integration (JSAA-ICNTJ2023)　（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 中井精一
２．発表標題 記録資料と日本語敬語形成史
３．学会等名 韓国・慶北大学校学術研究院研究講座
４．発表年 2023年

１．発表者名 中井精一
２．発表標題 日本語敬語の広がりとその背景
３．学会等名 地域言語研究会2023年度研究発表会
４．発表年 2023年

１．発表者名 大西拓一郎
２．発表標題 方言敬語の地理的かたより沿岸部地域話者の言語的特徴
３．学会等名 地域言語研究会2023年度研究発表会
４．発表年 2023年

１．発表者名 ダニエル・ロング
２．発表標題 沿岸部地域話者の言語的特徴
３．学会等名 地域言語研究会2023年度研究発表会
４．発表年 2023年

１．発表者名 川村清志
２．発表標題 祭礼からみる「社会」の分節化と縮減する祭りへの視座
３．学会等名 地域言語研究会2023年度研究発表会
４．発表年 2023年

１．発表者名 松丸真大
２．発表標題 受益形式クレルは主語尊敬形式に変化するのか
３．学会等名 地域言語研究会2023年度研究発表会
４．発表年 2023年

１．発表者名 中井精一
２．発表標題 日本語の理解と多様性－敬語の特徴とその形成に注目して
３．学会等名 JCC NIDA特別講演会（タイ国立開発行政大学院大学）
４．発表年 2024年

〔図書〕　計5件

１．著者名 岸江信介、中井精一編	４．発行年 2022年
２．出版社 昭和堂	５．総ページ数 281
３．書名 地図で読み解く関西のことば	

１．著者名 松田真希子、中井精一、坂本光代編	４．発行年 2022年
２．出版社 くろしお	５．総ページ数 200
３．書名 「日系」をめぐることばと文化	

１．著者名 秋道智彌・中井精一 編	４．発行年 2020年
２．出版社 桂書房	５．総ページ数 169
３．書名 富山湾　豊かな自然と人びとの営み	

１．著者名 中井精一	４．発行年 2023年
２．出版社 同志社女子大学	５．総ページ数 38
３．書名 敬語の広がりと多様性	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	Ｄａｎｉｅｌ　Ｌｏｎｇ (Long Daniel) (00247884)	東京都立大学・人文科学研究科・教授 (22604)	
研究分担者	大西　拓一郎 (Onishi Takuichiro) (30213797)	大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所・研究系・教授 (62618)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	川村　清志 (Kamura Kiyoshi) (20405624)	国立歴史民俗博物館・大学共同利用機関等の部局等・准教授 (62501)	
研究分担者	松丸　真大 (Matsumaru Michio) (30379218)	滋賀大学・教育学系・教授 (14201)	

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	真田　信治 (Sanada Shinji)	大阪大学	
研究協力者	岸江　信介 (Kishie Shinsuke)	奈良大学	
研究協力者	西尾　純二 (Nishio Junji)	甲南大学	
研究協力者	市島　佑起子 (Ichishima Yukiko)	鹿児島大学	
研究協力者	中川　貴 (Nakagawa Takashi)	田辺市教育委員会	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	乾　誠二 (Inui Seiji)	天理大学附属天理参考館	
研究協力者	田中　芳英 (Tanaka Yoshihide)		
研究協力者	尾田　武雄 (Oda Takeo)	砺波市文化財保護審議委員会	
研究協力者	城野　博文 (Jono Hirofumi)	泉南市プロモーション戦略課	
研究協力者	谷口　萌子 (Taniguchi Moeko)	国際交流基金パリ日本文化会館	
研究協力者	能美　仁 (Nomi Jin)	石川県立小松高校	
研究協力者	髙野　遥菜 (Takano Haruna)	温州大学（中国）	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関